

リスクコミュニケーションの新しい試みーサイエンスカフェー

食品安全委員会委員長代理 小泉直子

難しい

リスクコミュニケーション

食品安全委員会は昨年7月に創立5周年を迎えたことを機に、もう一度原点に立ち返って委員会の業務や機能のあり方の見直しを進めてきましたが、最も難しいのはリスクコミュニケーションであるとつくづく感じています。

これまで種々の試みをしてきましたが、食品安全委員会の重要な役割である食品健康影響評価について、やさしく分かりやすくご説明し、食の安全に対する認識を広く共有していただくことは、本当に難しいのです。でも、さらに工夫を重ね、その結果、安全=安心が生まれ、国民一人一人が自ら食品を「informed choice (納得した上での選択)」していくことが大切であると私は常々思っています。

サイエンスカフェ第1話

今回新しいリスクコミュニケーションの試みとして、群馬県と共催で銀座の歌舞伎座近くのスペース「ぐんまちゃん家(ち)」をお借りして、サイエンスカフェを行いました。第1話は1月20日午後6時半から約2時間「“安全な食べもの”って何だろう?~健康を守るから

だのしくみ~」について話しました。

この内容のポイントは、食べ物の中には健康を維持する上で有用なものや必ずしも必要としないものも含まれていて、どちらもからだの中でうまく利用されたり、あるいは解毒や排泄という機能により、健康が保たれているということ。したがって、有害なものが微量入ったとしても、健康を害するほどの大量でない限り、溜まり続けることはありません、というお話をしました。

サイエンスカフェ第2話

第2話は3月4日に「すべての物質は毒であり、薬である?」というテーマを取り上げました。

昔から日本でも「毒薬変じて薬となる」といった諺がいくつかあります。すなわちどんな食べ物、例えば塩や水であっても、少なすぎても多すぎても体に悪い影響を与えます。また、農薬であっても生涯毎日摂り続けても健康に影響を与えない範囲で決められたとおり正しく使えば、作物の病害虫を防ぐだけでなく、食中毒などの健康への悪影響を防ぐことができる場合もあります。要は、どんな食品であっても、また食品にたまたま微量含まれるかもしれない

毒物であっても、人の健康への影響は「量」で決まる、というお話をしました。

人間はこの文明社会で生きている限り、例えば車に乗って旅行したいと思うのは当然で、誰もそれを禁止することはできませんが、車に乗る限り排ガス中に発がん物質をごく微量ですが排出します。私は、人はみな被害者でもあり、加害者にもなっていることを常に知り、健康や環境にできるだけ影響しないところでうまく折り合っていくことが必要であると思っている、ということを話しました。

サイエンスカフェ第3話

これから開く第3話は「食品中に含まれる化学物質の胎児への影響」について取り上げるつもりです。サイエンスカフェ第1話と第2話では、参加されたみなさんが“楽しかった”と言って下さり、時間をオーバーしたにもかかわらず、“もっと長くても良かった”というお声もありました。

第3話もどうぞお楽しみに。

※サイエンスカフェの詳細内容は
http://www.fsc.go.jp/koukan/dantai_jisseki.html

食の安全への不安・疑問から情報提供まで、皆様のご質問・ご意見をお寄せください。



食の安全ダイヤル **03-5251-9220・9221**

●受付時間: 10:00~17:00/月曜~金曜(ただし祝日・年末年始はお休みです)

ご意見等は電子メールでも受け付けています。ホームページからアクセスしてください。

食品安全委員会ホームページ **<http://www.fsc.go.jp/>**

食品安全委員会 e-マガジン

食品安全委員会の活動がわかるメールマガジン。ホームページから是非ご登録ください!



内閣府 食品安全委員会事務局

〒100-8989 東京都千代田区永田町2-13-10 プルデンシャルタワー6階